

編集後記

チェリャビンスクイベントのみならず、天体衝突リスクやスペースガードまで含めた特集として「チェリャビンスクイベントと天体衝突リスク」を提案し、ゲストエディターを務めさせていただきました。各論文の著者の貢献、編集部のご尽力に感謝いたします。

現地時間の2013年2月15日未明、ロシアの片隅、ウラル地方に位置するチェリャビンスク市およびその近郊に大音響が鳴り響いた。この大音響をもたらしたチェリャビンスク隕石火球は、交通事情等から彼の地では非常に普及しているらしい車載カメラにより多数の映像記録が残された。大音響の原因の衝撃波についても核実験探知の為に全世界にCTBTOが展開中の微気圧観測網で明瞭に記録され、また爆発点直下付近でのカップリングにより励起された地動(主としてレイ

リー波)も、数千キロの範囲まで伝播したことが広帯域地震観測網の記録により判明している。これらのデータから、100年に1度程度の規模の隕石落下であったことがわかってきている。

かなりの規模の人的被害も伴った今回のチェリャビンスク隕石火球が一つの契機となり、これまで各国独自に進められていた地球への天体衝突リスクへの対応を、国連が主導して進める構想が承認されるなど、一般社会に与えたインパクトも大きなものがある。チェリャビンスクイベントは、まさに「地球への天体衝突は考えておかねばならないリスクなのだ」ということを知らしめる目覚めの号砲でもあったと言えるかもしれない。

(石原 吉明)